修論要旨

「火薬帝国」の観点から見たビルマのタウングー朝とペグー、アユタヤ王国

ー火器の使用とポルトガル人傭兵ー

齋藤　俊輔

本稿の目的は、16、17世紀における火器の普及とその影響を考察するところにある。ちなみに火器とは、火薬を使った武器一般を指すのだが、本稿では大砲や小銃など、火薬の推進力で筒から弾丸を発射する武器を主に火器、あるいは銃砲とした。火器の浸透とその影響を論じた研究には、近世ヨーロッパにおける「軍事革命」、オスマン朝、サファヴィー朝、ムガル朝の王朝の再編や成立と結び付けて論じられた「火薬帝国」がある。前者は、ヨーロッパでは、マイケル・ロバーツがこれを論じて以来、ある程度認知されている。簡単に「軍事革命」を説明しておくと、火器の普及から、新しい戦術の考案、あるいは築城術が生み出され、それによって兵力規模が大きくなった。このことで、当然必要な人的資源、経済力の規模も拡大する。そして、こうした人的・経済的負担の増大は、負担に耐えられるような中央集権国家を生み出す契機になった、というような流れをもった主張である。一方、後者の「火薬帝国」も、火器の普及と王朝の再編・成立を結びつけた議論であり、やはり火器が中央集権国家の形成に重要な役割をもったと考えられている。しかし、「軍事革命」にしろ「火薬帝国」にしろ――とくに後者においては――統一的見解を欠いたままであり、その定式に当てはめて物事を考えるには、世界各地における火器と社会の関連についての研究の進展を待たなければならない。そこで本稿では、まずヨーロッパの火器が東進していくプロセスを追いながら、火器と王朝の再編・成立の関係について考察することにした。

また、本稿ではビルマ・タイ地域をとくに論文の主軸に選定したのだが、その理由はヨーロッパやイスラム圏、インドなどの内陸の乾燥地帯にできた王朝と異なり、この地域が海上交通と深く結びついた地域に位置したからである。それとともに、東南アジア史で盛んになりつつある「港市国家」論の議論から、「火薬帝国」との対応関係となると推測できたため、とくにこの地域を選んだ。

第一章は、火薬に関して、ビルマ、タイなどの地域と他の地域の差異を考察する意味で、火薬の起源や火器の発明を論じた。火薬の起源に関して、中国とイスラムでどちらが先かは分からない。しかし、発明された火薬が13、14世紀には世界各地に運ばれ、よく知られた物質となっていた。そして、やはり火器、つまり火薬を使った兵器もすぐに世界各地に拡散して、武器として用いられた。そのなかでも、ヨーロッパでは火器がとくに発展した。また、火器が発展するとともに戦術が変化したり、社会自体も変容していった。それはヨーロッパだけではなかった。それは、いくつかの地域で共通して起きた変化のように思われた。

第二章では、火器の拡散が与えた影響が、

「火薬帝国」と呼ばれる王朝を作り出したことを論じる。「火薬帝国」という考え方は、16世紀の乾燥地帯に興った遊牧民族に起源を持つオスマン朝、サファヴィー朝、ムガル朝のイスラム三大帝国の中央集権化と領土拡大の要因を銃砲の使用に求めた議論である。「火薬帝国」は、シカゴのイスラム歴史家マーシャル・ホジソンによって提唱された。しかし、本稿ではホジソンの「火薬帝国」を直接理論として持ちこまずに、具体的に三大帝国と火器の関係を検討し直すことを目的とした。最初に論じたのは、オスマン朝の銃砲に関連した歴史の流れである。オスマン朝の歴史では、火器と常備軍であるカピ＝クル軍団の成立が、スルタンと呼ばれる絶対君主の力を強める働きをしたことを論じた。ところが、一方でこの中央集権体制の確立過程で、カピ＝クル軍団の火器を扱う歩兵部隊でもあるイェニチェリが、暴動を起こすことによって、その政治権力に変容を迫ったことも同時に論じておいた。こうした火器の作用と反作用とも言うべき影響はオスマン朝にとどまらなかった。それはもう２つのサファヴィー朝、ムガル朝の「火薬帝国」にしても同じことであった。サファヴィー朝でも常備軍が設置され、その政治権力の崩壊も常備軍制度ともに成立した絶対的な君主制が過度に行きすぎたため起こったものだった。ムガル朝では少し事情は違うが、おおむね火器が絶対君主の政治権力を強め、そして火器を用いて領土を拡大しすぎたことで帝国の崩壊を導いた。それぞれ個性を持つ三大帝国であったが、その編成と崩壊は火器によるものであったことをこの章では示した。

第三章では、ヨーロッパと火器の関係、とくにポルトガルのアジア進出における火器の役割について論じた。これについては、チポラやジェフリ・パーカーが詳しく論じており、それらを参考にした。それは、ヨーロッパの海外発展が「軍事革命」と呼ばれるヨーロッパにおける一連の変化がヨーロッパの海外発展を助けたという主張である。とくに、軍事技術面での進展は、アジアでヨーロッパ人が根拠地を作るのに重要だった。まず第１に、アジアになかった大砲を帆船に備え付けるという技術で、ヨーロッパ人、とくにポルトガル人はアジアの艦隊や、港市を攻撃し、制圧することができた。さらに、港を制圧し維持するようになると、要塞を建設しなければならなかった。そのときも、要塞建設の技術には、イタリア式築城術というヨーロッパの技術を利用した。つまり、ヨーロッパの技術がヨーロッパ人にとっての優位であった。ちなみに、この章の目的は、ポルトガル人の国家の活動、あるいは表の面が火器と結びついたことを論じて、第四章でふれるポルトガル人傭兵ら民間人の活動との対比しようというところにある。

第四章は、本稿の中心となる章である。ここでは、とくにビルマのタウングー朝、タイのアユタヤ王国の抗争を例にとって火器と国家の関係を検討している。とくに注目したいのは２点ある。１点目は、タウングー朝が火器の影響を強く受けた王朝であり、それからするとアユタヤ王国は別の系統の王朝だったということである。２点目は、先も述べたが、ポルトガル人が傭兵活動を盛んに行なった地域だということである。また、ポルトガル人傭兵の活動は単に傭兵活動に止まらず、ビルマで独立した王朝となったという興味深い事実があり、ポルトガル人の活動について研究の余地があることを示すものであった。

第五章は、第四章で述べたことのまとめと補足にあたる。第五章では、タウングー朝が

崩壊した後に、軍隊が再編成されたことを重要な論点としてまとめている。また、ここでは、アユタヤ王国が、近年「港市国家」として成立したという研究成果に照らし合わせて、タウングー朝と比較を試みた。

こうした検討から、火器の普及とその影響をまとめると、各地の王朝のみならずビルマ・タイの王国の盛衰とも深く結びついていたことがわかった。まず火器の普及の影響は、いくつの変化をもたらしたといえる。変化のひとつは、火器の普及が王朝の版図の拡大を促進したことにある。そして、その過程で、同時に権力の集権化が起こった。また、集権化の動きは、火器自体を王朝の独占物とするような手段でも示された。ただ、こうした王朝の拡大と集権化は、火器と結びついたものであったが、単に火器という技術の導入がもたらしたわけでなかった。多くの場合、技術とともに火器を持った専門人を必要とした。専門人は最初、傭兵として王朝に雇われた。しかし、それが統治システムの変化によって常備軍として整備されるようになった。それが典型的だったのが、オスマン朝とタウングー朝だった。オスマン朝では、東ヨーロッパのセルビア兵などを砲兵隊として用いていたのだが、そのうちイェニチェリという王の近衛部隊が設立され、火器を大量に使用した。タウングー朝でも同じように、ポルトガル人が到来して、一時期は彼らが王の護衛や指揮官として登用される状態が続いたが、一旦崩壊した王朝を建てなおしたときに、アフムダーン制の下で常備軍が作られたのである。

ところが、火器の普及の影響は、王朝の成立に貢献しただけでなく、のちには崩壊の一因となった。とくに、本稿の中心となったタウングー朝では、オスマン朝やムガル朝の崩壊を同じように繰り返したかのようにみえる。ムガル朝ではバーブルによる北インド征服後、同じく火器を備えたシェール・シャーの王国によって一時的に滅ぼされてしまう。また、オスマン朝での統治体制の危機は、イェニチェリが王に対して暴動を起こしたことで起こった。タウングー朝の崩壊は、これら王朝の崩壊の引き写しだった。ビルマでは、シェール・シャーがアユタヤ王国にあたり、そしてイェニチェリはポルトガル人傭兵だったのである。タウングー朝は、火器を備えたアユタヤの軍隊によって、ほぼ壊滅させられたし、ポルトガル人は崩壊したビルマで王朝を作り出したのである。ここには明らかに、他の地域と同様、火器の普及の反作用というべき現象も平行して見られるのであった。

しかし、こうした火器の影響には、普遍的な部分も多くあったが、決定的な違いを見せる場合もあった。それが本稿では、タウングー朝とアユタヤ王国の間で明らかになった事実であった。それを本稿では「火薬帝国」と「港市国家」と言い表わしたが、あるいは違った表現でも良いのかもしれない。たとえば、それは、「大陸国家」と「海洋国家」と定義付けることもできるだろう。また、より説明的に述べると、それは軍事力を集権化の中心原動力にするのか、交易による富を利用するのか、という違いであり、しかも完全にどちらかに偏るというより、割合の問題であった。そのことは、タウングー朝は「火薬帝国」の中でも特殊な位置にあったことを示すこととなった。タウングー朝は、インド洋交易を通じた海上交易と親和性が強く、内陸の「火薬帝国」よりも、ともすれば「港市国家」として成立してもおかしくない状況にあった。ところが、タウングー朝は、内陸部やアユタヤの侵攻を繰り返したのである。このことはアユタヤが「火薬帝国」でなかった事情と全く

反対の要因によるものであったと思われる。つまり、タウングー朝にとって脅威だったのは、アユタヤ王国の利点である地理的条件にあったため、それを覆すには「火薬帝国」化する以外にアユタヤをしのぐ道はなかったのである。いいかえれば、アユタヤ王国がタウングー朝を「火薬帝国」として成立させる要因になったのである。

ところで、これまでの研究から火器と王朝の盛衰を結びつけて考えることは半ば容認されるといえるが、それ以上に注目したい問題が、火器の普及と影響という文脈の中にあるように思える。それは、本稿で若干言及した傭兵活動をした民間人の動きについてである。この時代の傭兵活動は、火器の使用と不可分だったことはポルトガル人の活動その他を見ると明らかである。さらに、本稿では触れられていないが、日本でも、傭兵活動は紀州の雑賀党、根来衆などをみれば、同じように存在したことがわかる。これは火器の到来――あるいは新技術といってもいいが――が、新しい職能集団を生み出したといえるし、大げさにいえば、民衆や民間人に社会的な地位を与えたといえる。また、とくに南アジアや東南アジアという限定つきで考えると、火器はこの地域でのヨーロッパ人の新規参入を容易にさせたのである。しかも、その新規参入が、今までのヨーロッパ人のアジア進出の歴史で言われたような国家活動の手段ではなく、民間人の力によるものだったことは、注目に値する。

火器と社会の変化の関係を考察する研究が、ヨーロッパでは「軍事革命」として語られるようになったことは、はじめに述べた。しかし、火器と社会を結びつけるような研究が、それ以外の地域で進展しているとは言い難い。それゆえ、今後火器の社会史的な研究の進展が望まれるように思う。本稿では、とくにビルマとタイ周辺を事例として取り上げたわけだが、その中では火器を持ったポルトガル人が在地の権力構造を上下するという過程をみることができた。このことは、ポルトガル人を含めたヨーロッパ勢力が、なぜアジアに進出できたのか、という問いのひとつの答えを暗示するものになるかもしれない。また、ポルトガル人と在地権力との関係を解析することによって、東南アジアの権力構造をより詳細なものとすることができると思われる。それゆえ、それを論者の今後の方針と定めて、本稿をしめたい。